

経口下剤の処方動向に関する調査

廣瀬 靖章¹⁾、小山 貴文²⁾、前田 守³⁾、長谷川 佳孝³⁾、月岡 良太³⁾、
森澤 あずさ³⁾、大石 美也³⁾

- 1) 株式会社あさひ調剤 アイン薬局 春日部西口店
- 2) 株式会社あさひ調剤
- 3) 株式会社アインホールディングス

【目的】便秘は患者の QOL 低下に繋がるため、適切な治療が必要となる。近年は、従来とは異なる新たな作用機序を持つ経口下剤の登場により、便秘治療の選択の幅が広がってきている。本研究では、経口下剤の院外処方動向を調査し、便秘の薬物治療の充実に向けた薬局薬剤師の課題を抽出した。

【方法】2017 年 1 月から 2019 年 10 月まで開局していた当社薬局 606 店舗にて応需した処方箋 38,510,082 枚のうち、定期服用指示がある経口下剤を含む処方箋 3,413,283 枚を対象に、医薬品一般名ごとに処方回数を集計した。得られた結果は、乳幼児(7 歳未満)、少年(7 歳以上 18 歳未満)、成人(18 歳以上 65 歳未満)、高齢者(65 歳以上)の年齢区分別に分析した。

【結果】全年代では、酸化マグネシウム(以下、MgO)の処方割合が最も高く、57%前後で推移した。次に処方割合が多かったセンノシド製剤の処方割合は、集計期間中に 26.0%から 21.7%まで減少した。年齢区分別では、成人、高齢者は全年代と同様の傾向であった。乳幼児と少年でも MgO の処方割合が最も多く、集計開始時点ではそれぞれ 74.4%、82.2%と経口下剤処方のほとんどを占めた。この傾向は 2018 年 11 月まで継続したが、マクロゴール 4,000 配合剤(以下、PEG)の上市と処方割合の増加に伴って MgO の処方割合が減り、集計終了時の処方割合は、乳幼児と少年で MgO が 52.8%と 65.1%に、PEG が 28.4%と 19.1%になった。

【考察】本研究より、成人や高齢者の便秘に対する薬物治療には MgO が主に使用されており、腎機能の低下や高 Mg 血症の発症などに引き続き注意が必要である。しかし、今回の調査で乳幼児や少年の処方傾向で確認された大幅な変化は、薬局薬剤師が注意すべき点の大幅な変更を生じる恐れもあるため、新薬が上市した際などには、その薬学的情報だけでなく、処方傾向の変化などについても積極的に情報収集に努めることが必要と考える。

(第 30 回医療薬学会年会(2020 年 10 月, Web 開催)にて発表, 一部要約)